

館といった施設が見当たらないが、資料類が逸散しないうちに早期に設置することが必要であろう。甲府市史が活字による市の歩みを示すものとすれば、博物館などの文化施設は具体的な生の歴史資料によって今日までの歩みと、さらに伝統や文化を実際に見せる場となる。

百年の大計とも言われる市史編さん事業に対する情熱を、こうした文化施設建設へとさらに大きく展開されんことを切に希望するところである。

甲府市史編さんの十二年

編さん委員 斎藤典男

昭和五十七年八月二十六日、甲府市史編さん準備委員の委嘱式および委員会が、市長室で行われた。翌五十八年四月に正式に発足する編さん委員会の準備のためである。

筆者は、これより半年あまり前、市長室広報課から甲府市史編さん事業が着手されることになり、高木伸也氏が担当することになったので協力してほしいという依頼を受け、高木氏と何回か基本構想の話し合いをした。市史の編さんがどのような展開となるか、まったくの未知の段階での打ち合せであった。

そして、編さん委員会が発足すると、しばらくは史料調査の毎日であった。これより十数年前、筆者の古文書講座の終了生を中心として結成された甲府市古文書研究会の会員と調査を進めていた金桜神社文書の整理が市史の管轄となって継続され、ついで湯村の広瀬家文書の整理が古文書研究会との共同調査として始められた。

その後、史料調査の基礎となる所在調査を行うための市史史料調査協力員が任命され、各地域の調査協力員さんにより報告された所蔵者のお宅に調査に出かけた。近代史の齋藤康彦氏・事務局の斎藤紳悟氏・近世史の斎藤典男という親戚でもない三人の斎藤氏が、調査によく歩いた。三者の無関係の関係を説明するのに、苦心したものである。

昭和二十年の甲府大空襲のためほとんど灰塵に帰した甲府の街には、まったく古文書などは残っていないのではないかと、いう当初の予測が見事にはずれ、史料編の近世町方編の二巻の刊行の予定が、のちに三巻とするほどの多くの文書が見つけられた。私どもにとっては、うれしい誤算であった。

村方編の史料調査も、ほとんど同時進行で行われた。各家に残された史料には古文書もあれば書画骨董もあり、昔の教科書や俳書もあるという雑多な場合が多い。こうした大量の史料を調査・整理しながら、市史に使用できるかどうか、一点一点を判断していく調査である。しかも、ときには自分の担当分野以外の史料も調査することもあった。

暑い夏の日、木枯らしの吹く冬、季節に関係なく市民からの情報があれば、調査に出かけた。良質の史料が残されている場合が多かったが、空振りに終わるときもあり、一喜一憂の毎日であった。こうして、三年あまりは史料調査に明け暮れたが、これは楽しい毎日であった。史料編に掲載できるか、あるいは本編に利用できそうな史料が発見できたときの喜びは大きかったものである。

市史編さん委員への辞令交付が、原忠三前市長の就任後の最初の仕事であった。原市長が「こういうことには、まだ慣れていないの

で」といいながら辞令を渡してくれたのも、いまは懐かしい思い出である。

編さん委員会が、発足したときの十年先は遠い時間であったが、河口・原・山本と三代の市長が代わり、完成の時期を迎えて、ようやく終わったなど、感慨も新たである。

（市史編さんを終えて）

専門委員 北原 進

もう十年も経ってしまったのか、という思いが改めてします。史料を探している間は、テーマについて自信がもてる迄と考えていましたら、そのうち時間もなくなってきた、それぞれ分析不十分なまま通史にとりかからねばならなくなりました。その執筆も力不足の上に、なぜか勤務先の多忙も倍加するようになって、中途半端な内容になってしまった。もともと非力ではあったが、取り組み方が不十分であったことを深くお詫び申しあげたい。

甲府から離れている者が市史に関わろうという場合、遠くから全体が見られるような、客観的立場がもてるように思われる。それは実は期待したほどではないのだが、逆に土地感が乏しくて、史料の理解に手間どったりすることもある。編さん室や現地委員の方には連絡なしに調査に参上した折には、夜などあちこち飲み歩いて、つとめて「下情」に通じようとしたこともあったが、文字通り一夜漬けで、執筆テーマに実感を添えるまでに至らなかった。まことに申し訳ない。

かくて余りお役に立てなかったのに、終了となると気がかりなこ

とはある。自治体の歴史編さんが行われると、その過程で収集された資料類は、刊行書・原史料・写真フィルムなどの形態を問わず、通常は図書館郷土資料室などに引継がれる。しかし最近ではもう一歩進んで、市史編さん事業が古文書館設立にそのまま発展する例が多くなってきた。甲府市史でも、当初はそういう議論がなかった訳ではないのに、もっぱら「編さん事業」の推進に集中してしまい、これが「甲府市文書館」の方に発展性をもち得なかったのは、残念というほかない。

江戸時代・明治期やそれ以後の、比較的新しい非現用文書を収め、活用をはかる機関を作るとは、市民による市史研究をその後も継続させ、正しい郷土意識に裏付けされた市民を育成するために不可欠である。甲府市ともあろうものが、いまだに文書館設立の話がないなどと言われないようお願いしたい。最近ある会合で、山梨県史も文書館（歴史資料保存利用機関）の構想をもっていない、編さん事業の一環に組み込んでいないと、関係者から聞いた。これでは県も市も、文書館法成立以後の研究や全国的な動向にまったく無関心であったと評価されるであろう。だが県史はまだこれからでも態勢がとれる。甲府市史だって、その検討をこの編さん事業に継続して始めることが、最良の終結の仕方である。

そのようなことを考えると、この『甲府市史研究』誌も、市として何らかの形で継続し、研究のみならず、編さん事業に洩れていた問題を検討していく機関誌とすることができないだろうか。